

「山川草木」から生まれた讃歌 —天台声明の実践からみえるもの—

桜井 真樹子 (作曲・声明・白拍子)

要旨

本稿は、2017年9月の人間環境学研究所のシンポジウムで桜井直樹氏の発表「鐘の音を科学する—2次元音階を通した科学の文化の統一的研究の模索—」に基づいて、天台声明の声の捉え方を検討し、その資料と実践を紹介してゆく。声明は、修行によって習得される^{ゆが} 瑜伽の行でもある。円仁がもたらした「南無阿弥陀佛仏」の極楽の世界観は「山川草木悉有仏性」という天台思想へとつながってゆき、「個」から「衆」の仏教讃歌を生み出した。また日本音楽やその音楽美学に影響を与えた。

キーワード：声明、円仁、天台、山川草木、念仏

<声明とは>

声明（しょうみょう）とは、仏教の中で、唱えられる真言、経典（お経）の中の詩的な箇所、あるいは、経典の文章そのものに旋律、つまり「節（ふし）」をつけたものである。

もともとは、紀元前12世紀から紀元前3世紀にかけて、アーリア人が伝えたインド最古の4つの聖典「ヴェーダ」の中の「リグ・ヴェーダ」に、神々への賛美のための呪句、神々に対する呼びかけ、神々に対する祈願が書かれた。それを声に出すことに始まる。

それらは、真言「マントラ」として知られる。それは呪文のイメージでもあり、超自然的なパワーを出現することができると思われていた。神の名前、たとえば「不動明王」の真言「ナーマク・サーマンダ・バーサラ・ナンセンダ・マーカロシャーナー・ソワタラ・ウンタラタ・カンマン」、そこには、もともとの意味はあった¹⁾が、唱える人々は、すでに意味を忘れていた。それでも構わない。重要なことは真言に、意味があるのではなく、そのことばに力が宿っていることである。真言に宿る神聖な力をバラモンの僧

¹⁾「ノウマク サンマンダ バサラダン センダンマカロシャダヤ ソハタヤ ウンタラタ カンマン」(namah samanta vajrānām candamahārosana sphotaya hūm trat hām mām)

大意：「激しい大なる怒りの相（すがた）を示される不動明王よ。迷いを打ち砕きたまえ。障りを除きたまえ。所願を成就せしめたまえ。カン マン（不動明王を象徴する音）。」

侶たちは、「ブラフマン (brahman)」と言った。「ブラフマン」は日本で「梵」と訳される。

「声明」は、1960年代以前までは、「梵音 (ぼんのん)」と呼ばれていた。

1-1. 発声

声明はどのような声で唱えられるのだろうか？

たとえば不動明王の真言を、声明のような節をつけずに唱えられるのを、護摩供養などで聞いたことがあるかもしれない。護摩供養では、信者によって願い事が書かれた「護摩木 (ごまき)」を導師²⁾は火に投げ入れ、成就のために祈禱する。成就の実現のために唱えられる声は、気合が入れる。気合も「梵 (ブラフマン)」を表す力のひとつだろう。

気合を込めてゆくうちに、その声は力強く、そして、美しく響くことに気付くかもしれない。それは、何度も繰り返すことで身につけたものだろう。

あるいは、経典の中の詩的な文言を綴りながら行われる「曼荼羅供養」の声明は、言葉に節 (旋律) が付けられ、一音が長く延ばされてゆく。一音は、15秒から25秒と長く延ばされ、発声法の習得の過程が生まれてゆく。

1-2. 声を習得する

「梵=ブラフマン」のある声、「梵音」を身につけるために、どのような過程があるのだろうか？それは決して、音程やリズムを正確に取る、音域を広げる、美しい声を出す、ということを目的としているのではない、もちろん、それら音楽的技術を習得できればいいが、それ以上に「梵」の宿る声を目指さなければならない。

音楽を学ぶものは「声のメソッド (方法)」を学習する。しかし、学僧たちは、修行へと目を向ける。

<好相行 (こうそうぎょう) >

天台宗には「好相行」という修行がある。三千の仏の名前³⁾を読み、一つの仏さまの

²⁾ 供養の儀礼を行う者。

³⁾ 過去に現れた仏さまの名前「過去莊嚴劫千仏名経 (かこしょうごうせんぶつみょうきょう)」が千、現在に現れている仏さまの名前「現在賢劫千仏名経 (げんざいけんこうせんぶつみょうきょう)」が千、未来に現れる仏さまの名前「未来星宿劫千仏名経 (みらいせいしゅくこうせんぶつみょうきょう)」が千で、合計三千。

名前を唱えるたびに、一回の「五体投地」を毎日繰り返す。五体投地とは、額、両肘、両膝の五つの身体の部分を地につけて礼拝する作法のことである。これを、比叡山の浄土院の中のある閉ざされた空間でひとり、目の前にある特定の（その人を守護する）仏が見えるまで行う。だいたい一般には、三ヶ月から四ヶ月かかるという。行のあいだは、縄床に坐っての仮眠だけが許され、本格的に眠ることはできない。

好相行を満行（まんぎょう、無事に終えたこと）した方からお話を伺ったことがある⁴⁾。「最初是一日に三千もの仏名を読むと、最後には声が枯れてしまう。三千回を一日で終えることができず、翌日持ち越しになる。そのうち両膝が切れて血が出る。目の前には魑魅魍魎（ちみもうりょう）が見える。よだれを垂らして、部屋の角にうずくまって時間が過ぎる。しかし両膝に瘡蓋（かさぶた）ができると、五体投地が楽になってくる。そのころには、声が透き通るように通って、一日が楽に越せるようになる。そして、日々が過ぎてゆき、ある日、三ヶ月も終わりに近づいてきたころ、目の前に仏さまが現れた。」

<常行三昧（じょうぎょうざんまい）>

「南無阿弥陀仏」を24時間、眠ることなく唱える行。

比叡山の常行堂の中央には、阿弥陀仏の像があり、その周りに竹の手すりがある。行者はそれに捕まりながらも、右回り（時計回り）に歩き続けながら、念仏を唱える。天井から吊り下げられた紐に捕まって休むとか、横になっても痛くて眠れない、硬くて節くれだった籐で作ったベッドで休む。とにかく「寝ない」日々を90日間続ける。

一度、常行堂に行ったとき、中から「南無阿弥陀仏」の朗々とした、そして透き通るような声が聞こえてきた。「鳥の声」のような、空間を切るような透明感のある声だった。

<千日回峰行>

二百六十体の仏、神社の神、石仏といった野仏（のぼとけ）を訪ね、その名を唱え、さらに歩きながら経文を唱える。それを千日行うのが、千日回峰行。7年間の間に千日間、比叡山の峯々を歩く。1年目から3年目までは1年に100日、4年から5年目は1年に200日、1日30キロを約6時間で歩く。6年目は100日を60km、7年目は100日を84km、あともう100日は再び30kmに戻り、比叡山中を歩く。歩きながら唱えようとすると、仏さまの名前を覚えなければならない。最初は覚えられないので、首からプラカードをかけて、それを読み上げていく。その内に仏さまの名前を全部覚えてゆく。30km

⁴⁾ 高川慈照氏 比叡大聖天最乗院住職

を夜中の2時に出発して朝の8時に帰るには、それ相応の歩く速度が要求され、唱えるスピードも相当速くなる。回峰行者は比叡山無動寺谷の大乗院の住職でもあり、一日二座、本尊の不動明王の前で護摩供養を行う。

彼らの目的は、よい声、美しい声を出すことではない。しかし、好相行や、常行三昧の行者は、朗々と澄んだ声で唱え、千日回峰行の行者は、独特の力強い声をキビキビと凄まじいスピードで唱える。

声明には、声楽の音楽的技法よりも、鍛え抜かれた身体から発せられる声を求められる。

1-3. 瑜伽の行

鍛え抜かれた身体から発せられた声を、ふたたび自己の身体に向けて問いかける。梵（ブラフマン）の力は、身体にどのように廻り、伝達され、響き、自己の感覚にフィードバックされるのか。自我（アートマン ātman）と梵（ブラフマン）のフィードバックと結びつきを見つめる声明の唱者。この実践を瑜伽（ゆが）の行という。瑜伽はサンスクリット語の「yoga（ヨガ）」の音写で、「結びつく」という意味。修行者は、自らが体得した声を発することにより、自我と梵を見つめる。「声明を唱える」とは、声による瑜伽の行のひとつと言える。

2-1. 南無阿弥陀仏の道

日本で天台宗を開いたのは最澄（766-822）だが、現在につながる声明曲を持ち帰ったのは最澄の弟子、円仁（794-864）である。

円仁は838年、最澄がなくなって16年後の44歳のときに、遣唐使の船に乗って留学した。

円仁の書いた旅行日記「入唐求法巡礼行記（にっとうぐほうじゅんれいこうき）」によれば、二人の学生僧侶、円仁と円載のうち、円載のみが五台山に行くことを許された。したがって円仁は、帰国しなければならなかったが、勉学への未練のあまり、遣唐船に乗らなかった。遣唐大使も円仁の志を応援し、金20大両を与えて別れた。そこで円仁は密入国を試みるが失敗。強制送還となるが、乗ったその船が完全大破。ここには円仁を絶えず後ろ盾した新羅人たちの計画的犯行が見え隠れする。1年後の840年2月24日には、登州文登県（今の山東省威海市）の役人から公牒（こうちょう＝ビザのこと）が出た。

黄山八会寺（河北省南部）から山地に至ったのが4月23日、ここから六日間、五台山をめざして、日々山谷を歩く。食うや食わずの旅ではあったが、五台山への道は絶景

のようだ。

「入唐求法巡礼行記」より

4月26日、天は晴れています。山谷を歩くこと二十里。…山風はかろうじて涼しく、青い松は嶺に連なっています。塘城普通院を過ぎて、西に行けば、嶺は高く、谷深い。翠の峯は雲を吐き、谷川の水は緑の流れとなっています。

4月27日、…峯の上の松林、谷の裏の樹木はまっすぐで高い。…山の頂きは厳しくそびえ、天の河に届かんとしています。松は翠碧（すいへき）の色で、青天とお互いを映し出しています。西の嶺の木の葉はまだ開いておらず、草も四寸にも至っていません。

4月28日について、五台山にたどり着く。そこからさらに竹林寺に至り、5月1日、法照和尚が書いた「五会念仏」⁵⁾を聞いた。

第一会 平声緩念（平声で緩やかに念じる） 南無阿弥陀仏

第二会 平上声緩念（平上声で緩やかに念じる） 南無阿弥陀仏

第三会 非緩非急念（緩やかにあらず、急ぐにあらず念じる） 南無阿弥陀仏

第四会 漸急念（ようやく、少しずつ急いで念じる） 南無阿弥陀仏

第五会 四字転急念（四文字を急に転じて念じる） 阿弥陀仏

「平声」は、中国音韻学で分類された声調のひとつ。上声も声調のひとつだが「平上声」は不明。「急」は、テンポを早めることであろうか。母音の抑揚を表す声調は、現在の天台声明の旋律のパターンに未だ影響を及ぼしていると考えられる。

2-2. 念仏の音

この「五会念仏」を作曲した法照に生没年代はわからない。「宋高僧伝」⁶⁾によれば、766年に南岳衡山（なんがくこうざん、湖南省陽市）の弥陀台（みだだい）で常行三昧（じょうぎょうざんまい）という修行をしているときに、生きたまま極楽国に往き、水鳥樹林の唱える念仏の「妙音曲」を感得したとある。人の声ではない。「南無阿弥陀仏」と水や鳥や木々の林が唱えたのを聞いたのだ。

山谷を越えて五台山の旅をした円仁は、彼なりに法照の「妙音曲」に共感したのではないだろうか？

真如堂⁷⁾では、今でも10月14日から16日の三日間、「引声阿弥陀会（いんぜいあみだえ）」という法要が行われている。その式次第では「甲念仏（こうねんぶつ）」と「乙

⁵⁾ 法照「浄土五会念仏略法事儀讃」より

⁶⁾ 「大正新脩大蔵経」 卷50「史伝部2」

⁷⁾ 京都府京都市左京区浄土寺真如町82

念仏（おつねんぶつ）」二曲を続けて「南無阿弥陀佛、阿弥陀佛、阿弥陀佛、南無阿弥陀佛、阿弥陀佛、阿弥陀佛」と六回念仏が唱えられる。そして阿弥陀経典が開かれて唱えられる。阿弥陀経は、極楽の世界を描写したもの。阿弥陀経が終わると再び「合殺（がっさつ）」で「阿弥陀佛」が八回唱えられる。たとえば、「甲念仏」の最初の「南無阿弥陀佛」は、「ンー、な（南）ー、アー、ムー、も（無）ー。あ（阿）ー、アー。び（弥）ー、イー、イー、イー、イー、イー、イー、イー、イー、イー。た（陀）ー、アー、アー、アー、アー、アー。」というように、一つの母音を長く伸ばす。ゆえに「引声」と呼ばれる。

円仁は、848年に比叡山に帰り、その年に常行三昧堂を建立し、851年に五台山念仏三昧法を始修したという記録がある⁸⁾。現在の常行三昧の行の行われるところである。

2-3. 音無しの滝

平安初期から中期にかけての天台声明の中心地は比叡山延暦寺の三塔（東塔、西塔、横川）であったが、横川から一つ峠を越えた大原に、寂源は1013年、念仏道場を行う阿弥陀堂（現在の勝林院）を建てた。さらに、良忍（1072～1132）が、1097年に大原に入り、引声念仏を修する道場として来迎院を建てた。来迎院から300メートルほど律川（りつかわ）たどっていくと、その源泉に「音無しの滝」呼ばれる滝がある。

良忍は、この滝の前で声明を唱えていたという。ある日、良忍の唱える声明の声に滝の音がかき消された。このことにより「音無しの滝」と言われているのだが。法照の聞いた念仏は、人の声ではなかったことを思い起こせば、良忍の声が消えて、滝の音が「南無阿弥陀佛」と唱えたのを聞いたのではないだろうか？

その声は、どのような声なのだろうか？人の声の倍音の構成には、たとえば、440ヘルツ（ドレミファソラのラの音）の音を出していれば、その周波数の構成は、880ヘルツ、1320ヘルツ、1760ヘルツと2倍、3倍、4倍の周波数の音圧（音のエネルギー。dB（デシベル）で表記される）を含んでいる。その中でも440ヘルツの音圧が最も強いので、440ヘルツの「ラ」の高さが人には聞こえてくる。しかし、滝のように音高のない雑音のような音の周波数は、あらゆる周波数の音圧が高く、それゆえに音の高さを識別することができない。人の声をどう発声すれば、音の高さを識別することのない音になるのだろうか。基音の音を出さずに、倍音を出す発声法、「カルグラ」や「ホーメイ」などトゥバ共和国に伝わる喉声、雑音を多く含んだ「ダミ声」「しゃがれた声」は、少なくとも基音となる音圧は、その倍音よりも飛びぬけて大きくは出ていない。

⁸⁾ 「魚山叢書」・耳・十五（大原所伝の引声）

滝の音、風のそよぐ音に馴染む声、空を突き抜けてゆくような鳥の声。極楽をイメージした法照から始まった念仏の声は、自然に戻ろうとしている。

3-1. 念仏を唱える

法照の見た極楽、阿弥陀経に描かれた極楽、これらは、修行者たちがある境地に達するときに見るヴィジョン（映像）であり、「声」だろう。極楽の情景には、なぜか人間は描写されない。水や樹林は輝き、それらが風にそよぐと、得も言えぬ妙音を奏で、鳥は美しい声で歌う。壮大な宇宙空間から水のあるところに生命が生まれ、それを自然（じねん）と呼ぶ。自然の最も美しい状態が極楽でもある。

この自然讃歌が天台宗の思想にあるゆえに、南都法相宗の「特定の修行者しか成仏することができない」という「定性二乗不成仏」に対して、「すべての命あるものに仏性が融通している」という「皆成仏」の論を立て、良源（912-985）、その弟子である源信（942-1017）は、それを深めていった。さらに天台思想は、山、川、草木に至るまで一切のものは仏になる可能性があるという「山川草木 悉有仏性（さんせんそうもく しつうぶっしょう）」に至る。それが比叡山の峰々を回りながら、一木一草に仏性を感じ取り、祈りを捧げる回峰行の形系をまとめていった。

「皆成仏」の思想は、鎌倉期の大衆による浄土系の信仰を大いに発展させていった。良忍も念仏三昧の修行を通して、融通念仏宗を開き、諸国を周り人々に念仏を勧めた。

3-2. 僧侶の学ぶ五明

バラモンの僧が、教養として学ぶ五つの明（みょう 知識⁹⁾のこと）、これを「五明（ごみょう）」と言った。1. 声明（しょうみょう śadba-vidyā) は、バラモンの五明ではもともと言語学であり、その発音を学ぶことから始まる。2. 因明（いんみょう hetu-vidyā) 経典の内容を議論し、論争する力を身につける論理学。3. 内明（ないみょう adhyātma-vidyā) 自派固有の学問。教理学。4. 医方明（いほうみょう vyādhi-cikitsa-vidyāsthāna) 治療の術。医学。5. 工巧明（くぎょうみょう śilpa-karma-sthānavidyā) 建築学。工芸。

神への讃美が[声明]であることは述べてきた。経典を議論すること[因明]、自派固有の経典を学ぶこと[内明]、人々の救済のために医学を身につけること[医明]、宗教建築や仏像、仏教具の製作[工巧明]、これらは僧侶には必要な知識であろう。

⁹⁾ サンスクリット語で vidyā

3-3. 空也念仏

さらに、工巧明は、土木建築、治水工事、災害対策、社会事業をも含んでいる。行基（668-749）の社会事業、空海（774-835）の満濃池（まんのういけ）の修築もよく知られている。

空也（903-972）は、阿弥陀仏を唱えながら遊行遍歴し、各地の土木、治水工事を行っていた。空也と共に働く人々は念仏を唱え土木作業や工事を行った。あるいは、遊行の道でマーチ（行進曲）のように念仏を唱え、鉢や瓢箪を鳴し、さらに踊りが加わって、踊念仏（おどりねんぶつ）へと発展した。ここに共に歌い、踊るための拍子とリズムが生まれた。それは六斎念仏（ろくさいねんぶつ）の芸能として各地に現在も残されている。

3-4. 三句念仏

空也が庶民の間にいたのに対し、ほぼ同世代の源信（942-1017）は、比叡山を中心として貴族階級の中で、浄土思想を広めていった。貴族といえども修行者ではない。「皆成仏」の論を立てた源信は、彼らを歓迎した。

慶滋保胤（よししげやすたね 933-1002）は、漢学者であったが、浄土信仰に興味を持ち、学生と僧侶のそれぞれ二十人によって「勧学会」という結社を作り、三月と九月の十五日に催した。十四日の夕方に比叡山西坂本の寺に集まり、十五日の朝には法華経を論議し、夕方には弥陀仏を念じる。夜には自作の漢詩を披露しあった。その勉強会を二十年続けた後、保胤は源信のもとで出家し、寂心と名を改める。

勧学会の経験をもとに、源信と寂心は「二十五三昧会（にじゅうござんまいえ）」を創案する。二十五名の僧侶たちによる結社が作られ、毎月十五日に集まり、朝には法華経を修め、夕方には源信の作った「二十五三昧式」の中の式文を読み、念仏を唱えた。この中の「十二礼文（じゅうにらいもん）」と「三句念仏」という曲は、拍子をとって唱えられる。十二礼文は一行七文字、三句念仏は「南無阿弥陀仏」の一行六文字が、16拍で唱えられる。わかりやすく言えば、4分4拍子が4小節あって、それが一行。十二礼文も三句念仏も伏鉦（ふせかね）が拍ごとに打たれる。三句念仏は「南無阿弥陀仏」を三句唱えて1曲となっており、それを2回繰り返す。つまり6回「南無阿弥陀仏」を唱えることになる。

「二十五三昧式」の式文は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という六つの世界「六道」を漢文ではなく、日本語によって描き、語られている。

「二十五三昧式」の念仏は、浄土教によって盛んに唱えられた和讃¹⁰⁾の拍子のもととなり、日本語の語りの式文は琵琶法師による仏教説話の語りものの原型となった。

大衆と貴族、比叡山の僧侶、それぞれの世界に隔たりはあったであろうが、平安末期の11世紀から12世紀、すべての階級が、足並みを揃えて、「個」から「群衆・大衆」の讃歌の道へ歩み始めた。そのうねりは、法照の「南無阿弥陀仏」の世界から、「皆成仏」「山川草木悉有仏性」への思いがけないハプニングだったのかもしれない。

謝辞

本稿は、2017年9月の人間環境学研究所のシンポジウムで櫻井直樹氏の発表「鐘の音を科学する—2次元音階を通した科学の文化の統一的研究の模索—」に基づき、音楽と科学の統一を日本音楽の声明から考察したものです。本紀要への執筆の機会を得られたことを、櫻井直樹先生（広島大学生物圏科学研究科・特任教授）に、深く御礼申し上げます。主に内容は「サリクス通信（主宰 櫻井元希）」のメールマガジン「chant～唱える（5回シリーズ）」からまとめました。最後に、本稿に記載した様々な比叡山での体験は、2017年11月に30年近く天台声明のご指導をいただいた中山玄晋先生（天台宗大僧正、延暦寺一山明王院住職）のご尽力によるもので、ここに哀悼の意を捧げたいと思います。

櫻井真樹子

ホーム・ページ <http://www.zipangu.com/sakurai/>

E-mail address; makiko_puti@mac.com

¹⁰⁾ 日本語による仏教讃歌。漢語や梵語と区別して呼称される。七五音の句を重ねることが多い。

参考文献

- 「岩波 仏教辞典」中村元、福永光司、田村芳朗、今野達編者 岩波書店 1989年
- 「円仁唐代への旅」エドウィン・ワイシャワー著 田村完誓訳 講談社 1996年
- 「猿之助、比叡山に千日回峰行者を訪ねる」市川猿之助・光永園道著 春秋社 2016年
- 「行とは何か」藤田庄一著 新潮選書 1997年
- 「魚山聲明全集」中山玄雄著 芝金聲堂 昭和37年
- 「CDブック 声明一天台声明と五台山念仏の系譜」天納傳中著 春秋社 平成11年
- 「草木成仏の思想 安然と日本人の自然観」末木文美士著 サンガ 2015年
- 「声明辞典」横道萬里雄・片岡義道監修 法蔵館 1984年
- 「大乘莊嚴經論 瑜伽・唯識部 12 新国訳大蔵経」袴谷憲昭・荒井裕明校注者 大蔵出版株式会社 1993年
- 「天台宗読経偈文全書Ⅲ（顕密法要篇）」木内堯央監修 多田孝文編集指導 大澤亮湛、勝野陵広、神谷亮秀、池田晃隆執筆 四季社 平成14年
- 「第十九回芸術祭参加『天台声明』解説書」片岡義道監修・解説 ポリドール 昭和39年
- 「天台声明概説」天納傳中著 叡山学院 昭和63年
- 「天台常用聲明」（経本） 芝金聲堂
- 「二十五三昧式」（経本） 芝金聲堂
- 「日本仏教人名辞典」 日本佛教人名辞典編纂委員会 法蔵館 1992年
- 「入唐求法巡礼行記 1」 円仁著 足立喜六訳注 塩入良道補注 平凡社 2004年
- 「比叡山延暦寺 世界文化遺産」渡辺守順著 吉川弘文館 1998年
- 「佛教語大辞典 縮刷版」 中村元著 東京書籍 昭和58年
- 「佛教比喩例話辞典」森章著 東京堂出版 昭和62年
- 「リグ・ヴェーダ讃歌」辻直四郎訳 岩波書店 1982年